

の膳。具も古きもの也。金箔押の木具も、今は神に供する物とのみおもへり。

〔微妙公御夜話〕一微妙公利常前田或時内藤外記殿へ御咄に、手前隱居之身にて、毎日木具にて喰致候事、奢之儀と存。塗膳部に可仕と申付て、二日三日たべ候得共、むさき様にて、其後又木具にてたべ申候、過分之事に候へ共、責て是程の事はと、如斯と御咄の由、藤田内藏允殿咄承り候。

〔風俗文選四〕出女說

やがて衣引かづき、再寢マタ子の夢のさめ時は、腹の減期ルゴを相圖とおもへり、高足打の塗膳にすはりながら、通りの馬士に言葉をかはす。略下

〔槐記〕享保十年霜月十日晝深諦院殿御茶ニ召サル○中略

御會席膳シヨンケイノリノ糸目、フチ
ラタメヌリノ糸目、フチ
黒椀クチ

〔風俗俳人氣質三〕早天から借屋を見廻る俳人の宿這入

傍から四人が合槌うつひやうしにて、亥からば、摠朱のかた地にして、膳椀貳十人前○中亥な亥な明日御みせ下され。○下略

〔花街漫錄下〕吉原百膳

吉原百膳とは、いはゆる二の膳もそはりて二百膳あり、ことぐく春正薄繪にて、下繪は狩野氏養ト法の筆也、おのく十人前づ、持傳へて、ことあるをりからは、いづれの家にも持出て、用ゐしならひ也しかば、いつとなく吉原百膳とぞいひならしける、

〔女重寶記五〕女用器財、懸盤カハハシ、螺足カヤウアシ、臺膳ダヒヤシ

〔嬉遊笑覽器用二下〕蝶足の膳は、明暦万治のころの草子の繪に、菓物などを盛る圖あり、その時代の折敷なるべし、今の蝶足に較れば、足低く先尖りたり、按るに、これけそくの類也、足の形、蝶花形に似たれば、花足にむかへて、蝶足といふなるべし、

〔守貞漫稿後集一〕膳